

富山県上市町

# 極楽寺遺跡発掘調査概報

—極楽寺地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う緊急発掘調査—

2004年3月

上市町教育委員会

富山県上市町

# 極楽寺遺跡発掘調査概報

—極楽寺地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う緊急発掘調査—

2004年3月

上市町教育委員会

## 序

上市町は富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する早月川、上市川、白岩川に沿って東南から北西に伸びる町です。北アルプスを代表する名峰・剣岳を間近に望むこの地では古来より人々の営みが連續と続き、それが現在多くの遺跡として残されております。

ここに報告する極楽寺遺跡は、縄文時代前期初頭の「極楽寺式土器」の標式遺跡であると同時に、古くから「块状耳飾」の一大製作址として広く注目を集めてきた遺跡です。平成14年度に極楽寺地区の急傾斜地崩壊対策事業が計画され、段丘上に立地する本遺跡の一部分が計画地にかかることになりました。それを受け、上市町教育委員会では平成15年度に事前の発掘調査を実施いたしました。

調査では堅穴住居跡1棟をはじめとする遺構とともに、縄文時代前期初頭から中期にかけての土器・石器等が多量に出土しました。中でも県下での検出例が少なく様相が不明瞭であった縄文時代前期末～中期初頭の土器群が多く、今後の研究の進展に大きく寄与することが期待されます。また块状耳飾や垂飾（ペンダント）などの上製・石製装飾品類も多く出土しており、当時の流行を垣間見せてくれています。

調査は平成15年6月から7月にかけて実施ましたが、この間に掘り出された資料が上市町及び富山県の歴史を物語るよですがとなれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり多大なご協力をいただきました富山県富山土木センター立山土木事務所、富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センター、富山考古学会、地元極楽寺地区のみなさまに心より感謝申し上げます。

平成16年3月

上市町教育委員会

## 例　　言

1. 本書は富山県地内に所在する極楽寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 試掘調査は平成15年5月26日から5月27日までの延べ2日間で実施し、本発掘調査は平成15年6月16日から7月31日までの延べ26日間で実施した。
3. 本発掘調査面積は、400m<sup>2</sup>である。
4. 調査は、富山県富山市木センター立山上木事務所の委託を受けて、上市町教育委員会が実施した。
5. 調査事務局は上市町教育委員会におき、調査期間中、富山県教育委員会文化財課・富山県埋蔵文化財センターの指導を受けた。事務及び調査担当は、教育委員会事務局長代理・文化振興係長 高慶孝と同主事 三浦知徳がこれにあたり、教育委員会事務局長 善内昭悦が統括した。
6. 本書の編集・執筆は調査担当が行ったが、遺物整理は調査担当が中心となり後述する整理作業員が行った。ただし「附章 富山県上市町極楽寺遺跡出土試料の<sup>14</sup>C年代測定」については総合研究大学院大学博士後期課程日本歴史研究専攻 小林謙一、国立歴史民俗博物館情報資料研究部 板本稔の両氏による稿を賜った。
7. 調査期間中、整理作業及び本書の作成にあたっては、下記の方々から有意義なご指導・助言並びにご協力を頂いた。記して深甚なる謝意としたい。

伊東美奈子、宇野降夫、王維坤、岡田一広、苅谷俊介、川崎保、木島勉、小島俊彰、小鶴芳孝、近藤顯子、酒井重洋、塙田明弘、鳥田修一、田中幸生、谷藤保彦、鄧聰、富樫泰時、西井龍儀、橋本正春、廣田晶子、藤田富士夫、牟永抗、堀沢祐一、麻柄一志、三浦亜友美、劉國祥、Nguyen Kim Dung（敬称略）
8. 調査参加者は次のとおりである。

発掘調査参加者：的場茂晃（富山大学大学院生）、細田隆博（富山大学学生）、荒木智恵子、岩城秀子、大沢邦子、大沢富子、金子みつゑ、川上富美子、酒井栄子、酒井文子、澤井新三、善内みき子、高城英子、高城富美子、中川セツ、早崎秋子、藤田一枝、松本純一  
整理作業員：苑原雄大、細田隆博、前田尚美（以上富山大学学生）、善内みき子

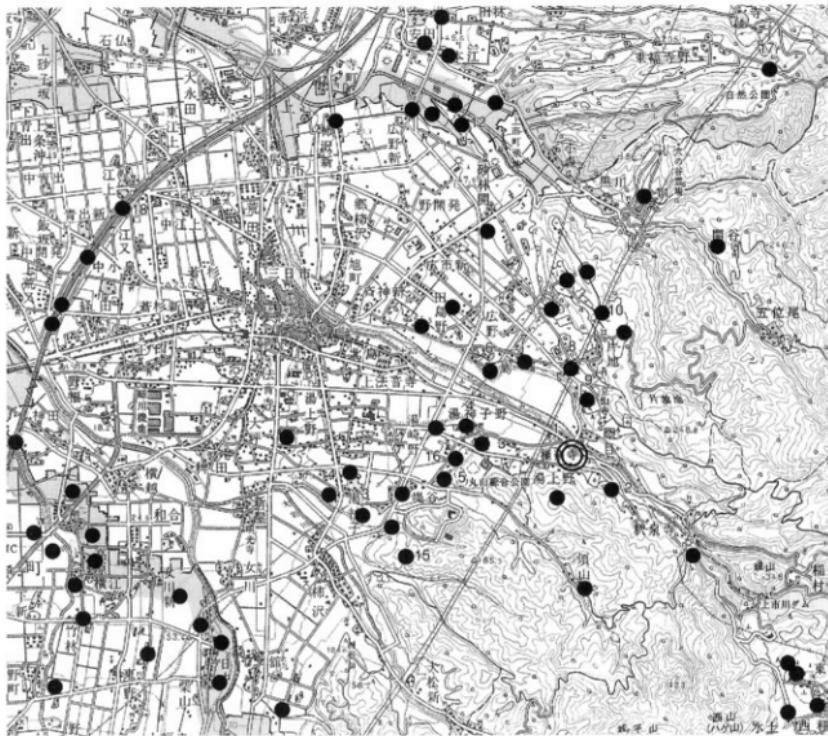
## 目　　次

I　遺跡の環境	1
第1図 地形と周辺の遺跡	
II　調査に至る経過	2
III　調査の経過と層序	2
第2図 地形と区割図	
IV　調査結果	4
1. 遺構	4
第3図 遺構全体図　第4図～第5図 遺構実測図	
2. 遺物	8
第6図～第15図 遺物実測図	
V　まとめ	21
引用・参考文献	21
附章 富山県上市町極楽寺遺跡出土試料の <sup>14</sup> C年代測定	22
図版（遺構・遺物写真）	

## I 遺跡の環境

上市町極楽寺遺跡は、富山県中新川郡上市町極楽寺に所在する（第1図・第2図）。遺跡は上市川左岸の河岸段丘上、段丘縁部が上市川に向けてやや張り出して視界が開ける部分に占地しており、標高は110m前後、現河床との比高差は約20mを測る。この地は昭和の初め頃には遺跡として認知されており、現在では縄文時代前期初頭に位置づけられる極楽寺式土器の標式遺跡として、また玦状耳飾をはじめとする滑石製品の大製作址として広く知られている。

周辺の縄文時代の遺跡としては、同一段丘面上には東に上極楽寺遺跡（縄文前期～中期）、西に丸山B・眼目新丸山遺跡（旧石器・縄文中期）、丸山A遺跡（縄文前期～中期）等が近接する。また上市川を隔てた対岸段丘上には永代遺跡（旧石器・縄文中期）、野島遺跡（縄文後期～晚期）、野島大門遺跡（縄文中期）等多くの遺跡が存在し、上市川左右両岸の段丘上は概期の遺跡の密集地帯となっている。この時期以降の遺跡では堤谷古窯跡（奈良）、湯神子A・B・D遺跡（縄文中期・弥生・古代・中世）、柿沢古墳群（古墳）等が付近に点在しており、この地域が旧石器時代から今日に至るまで人々の活動の基盤として利用され続けた、当町の歴史的背景となる地域であることを示している。



第1図 地形と周辺の遺跡(縮尺 1/50,000)

1. 極楽寺遺跡
2. 上極楽寺遺跡
3. 丸山B・眼目新丸山遺跡
4. 丸山A遺跡
5. 堤谷ギス谷遺跡
6. 野島遺跡
7. 永代遺跡
8. 片地遺跡
9. 野島大門遺跡
10. 永代野遺跡
11. 黒川上山古墓群
12. 砂林湖北遺跡
13. 湯神子A遺跡・D遺跡
14. 湯神子B遺跡
15. 柿沢古墳群
16. 堤谷古窯跡
17. 不水掛遺跡
18. 江上A遺跡

## Ⅱ 調査に至る経過

上市町極楽寺地内では平成14年度に急傾斜地崩壊対策事業が計画され、段丘上に立地する本遺跡の一部が計画地にかかることになった。これを受け、上市町教育委員会と富山県富山土木センター立山土木事務所との間で協議を行い、法面工事によって消滅することとなる段丘縁辺部について事前に発掘調査を実施し、記録保存の措置をとることで合意した。

なお、平成15年度工区については平成15年度中に調査を実施し、平成16年度工区については平成16年度に試掘調査を実施して再度協議することとなった。

## Ⅲ 調査の経過と層序

極楽寺遺跡は、昭和25年には故森秀雄氏らによる発掘調査、昭和38年・54年・56年には富山県教育委員会によって発掘調査が行われている。今回の調査対象地区は遺跡の北東端にあたる段丘崖縁辺部であり、富山県教育委員会の昭和54年度調査地点に接する。

### 平成15年度試掘調査

調査期間：平成15年5月26日から5月27日（延べ2日間）

調査対象：平成15年度工区約450m<sup>2</sup>

概要：生育中の農作物を避けて9箇所の試掘トレンチを設定して遺構・遺物の確認を行った（第2図下段）。

その結果、調査対象地区東端にあたる第9トレンチを除く8箇所のトレンチで遺構・遺物の存在を確認し、本発掘調査の必要な範囲を確定した。なお調査は上市町教育委員会が国庫補助金・県費補助金を受けて実施した。

### 平成15年度本発掘調査

調査期間：平成15年6月16日から7月31日（延べ26日間）

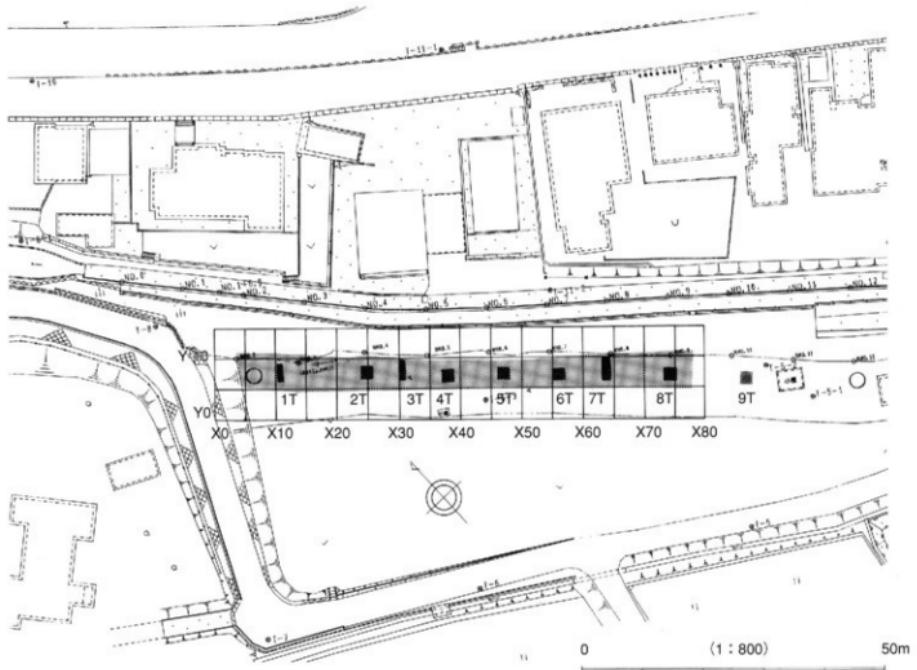
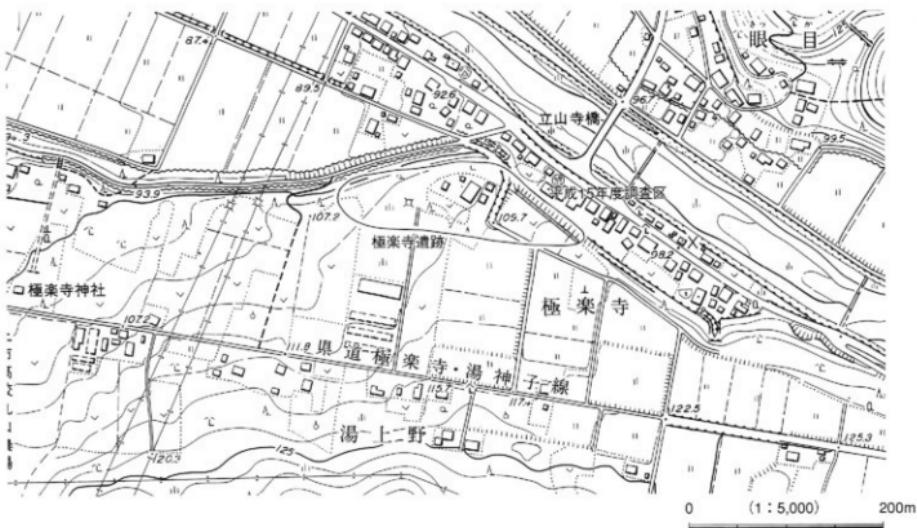
調査対象：試掘調査の成果を受けて設定した400m<sup>2</sup>

概要：段丘縁部に沿う調査区に合わせてグリッドを設定し、X25以西をI区、X45までをII区、X65までをIII区、それ以東をIV区と大区分し、検出遺構番号の千番単位とした。またその大区内に5mごとの小区を設けて遺物包含層出土遺物の取り上げ単位とし、本発掘調査を実施した。その結果、II-2区以東では風倒木及び戦時下の開削によって遺構面が失われてはいたものの、それ以西においては縄文時代に属する堅穴住居跡1棟をはじめとする種々の遺構を検出した。また調査区全体で整理箱約90箱分の縄文土器・石器・土製品・石製品の出土をみた。

なお調査費用は富山県富山土木センター立山土木事務所が負担した。

### 層序（第3図）

I層：黒褐色土（表土・耕作土層）、II層：黒褐色土（遺物包含層）、III層：暗褐色土（遺物包含層）、IV層：黄褐色土（地山、遺構検出面）の順で堆積するが、遺物包含層であるII層・III層は東に行くほど堆積は薄くなり、III層はX40付近で、II層はX50付近で消滅する。これは風倒木による搅乱及び戦時下の開削によるもので、IV区ではI層（表土・耕作土層）とIV層（地山）の間には双方が入り混じった搅乱層が介在するのみである。



第2図 地形と区割図 (縮尺 上:1/5,000、下:1/800)

## IV 調査結果

### 1. 遺構（第3図～第5図、図版1～図版4）

今回の調査では、調査区西半のI区・II区において縄文時代に属する堅穴住居跡1棟、土壙9基及び多数の穴等を検出した。前述したように調査区東半部では風倒木による搅乱、及び戰時下の開削によって遺物包含層・遺構面の大部分が失われており、ここで検出した遺構類はいずれもI層（表土・耕作土）から掘り込まれた近年の畑作に伴うものである。ここでは調査区西半部で確認した遺構のうち主なものについて概略を述べる。

#### 堅穴住居跡SI1001（第4図、図版2）

調査区東端に近い段丘崖付近で検出した堅穴住居跡で、今回の調査で唯一検出した住居跡である。一部風倒木による搅乱を受けてはいるが、長軸4.8m、短軸3.1mの長円形プランを呈し、床面は遺構検出面から15cmほど掘り込まれている。中央北寄りの地点では90cm×60cmの範囲に焼土・炭化物の集中する地床炉が存在する。その他床面では4基の土壙（SK01～04）を検出しているが、いずれも深さは5～10cmほどと浅い。また14箇所の穴（P01～14）のうち、柱穴として想定しうる深さを持つものはP01・06～10・13・14の8つであるが、その分布は南側に偏っており、柱の配列については不明である。

本住居跡からは整理箱で約40箱分の多量の土器・石器類を得たが、それらのはほとんどが埋土1層・2層中からの出土で、床面より20～30cmほど浮き上がった状態であった。土器類はほぼ完形に復元しうる個体も多く、いわゆる吹上パターンと称される遺物廢棄の状況を示しており、本住居跡に直接的に伴うものではないようである。

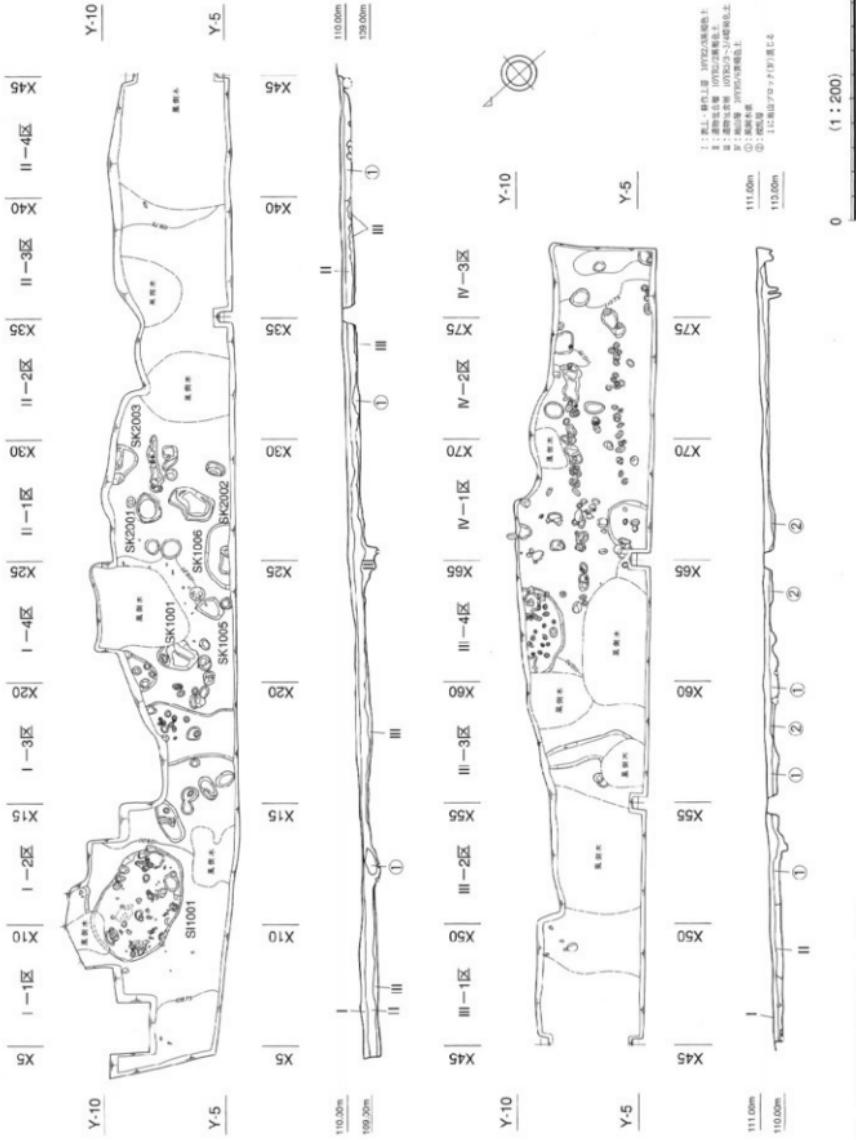
明確な床面遺物がなく本住居跡の構築・使用された時期の比定は困難であるが、地床炉中から出土した2点の縄文土器細片の内1点は胎土に纖維を含まない硬質の土器片であること、また床面に掘り込まれた土壙や穴の埋土からは前期初頭の纖維混入土器片と前期末～中期初頭の上器片とが混在して出土していることなどから、少なくとも前期初頭段階にまで遡るものではなく、大量に投棄された前期末～中期初頭の土器群に近い年代が推定されよう。

#### 土壙（第5図、図版3）

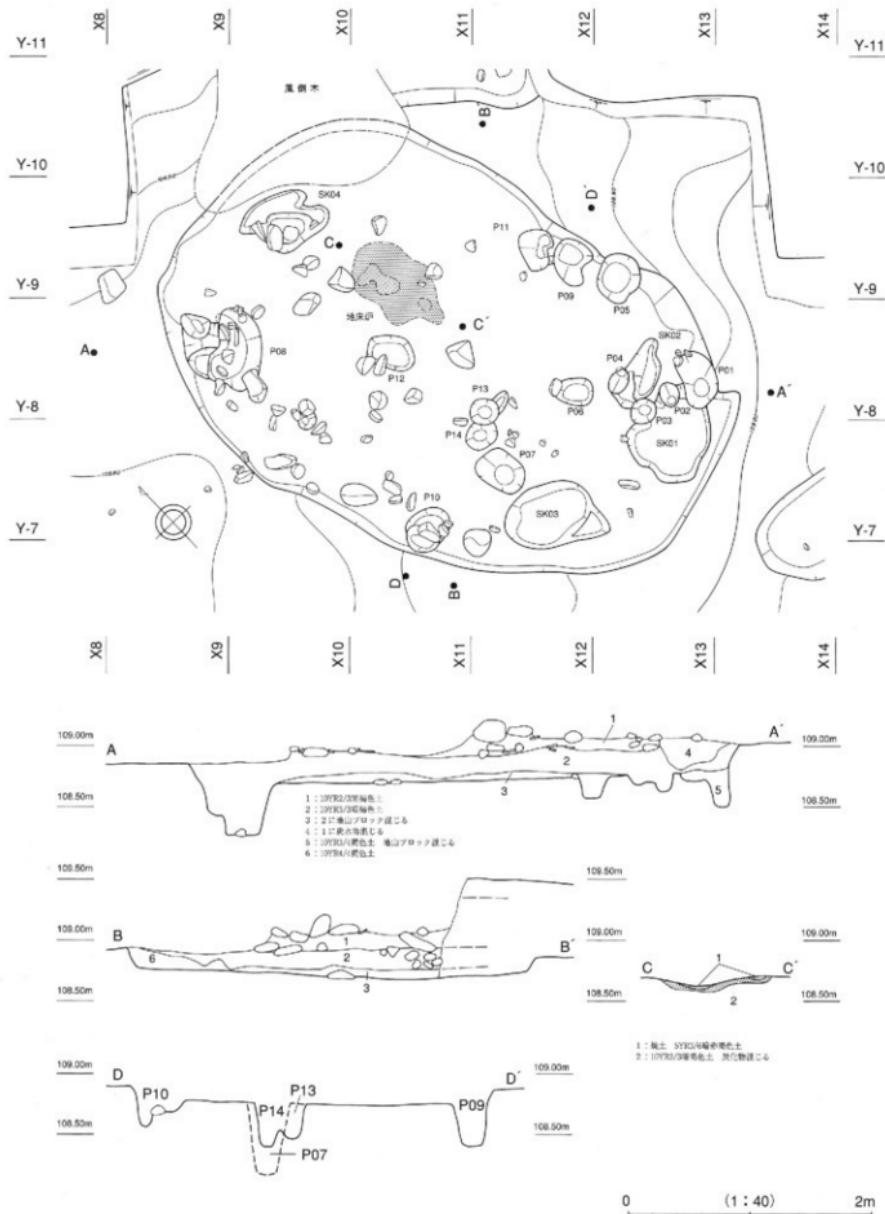
土壙は調査区西半部において9基検出したが、埋設土器を有するSK1001と袋状土壙となるSK2001を除いては、いずれも不定形でまた明確な伴出遺物を持たず、遺物が出土する場合も前期初頭の上器と前期末～中期初頭の土器と共に混在する状況であった。これらの構築時期はおむね堅穴住居跡SI1001と同様のものであろうと推測される。

SK1001は、I-4区で検出した1.7m×1.2mほどの長円形の土壙である。床面は3段の階段状をなし、深さは最深部で検出面から40cmほどを測る。最も高い北側の部分には深い掘り込みを伴って土器（第8図の14）が設置され、またそのすぐ傍からは磨面のある蛇紋岩礫（第15図の14）が出土している。土器の埋設状況から見ると本来の遺構掘り込み面はもう少し高かったものと推測される。なお、この土壙の南側から西側にかけて、ほぼ同じ規模の柱穴状の穴を3箇所検出した（SP1005・1006・1008）。いずれも長径0.7mほどで深さは30cm～40cm、二段掘り状を呈する。この土壙を円環状に取り囲むような配置にも見えるがその統一性にあたるものは検出されておらず、詳細は不明である。

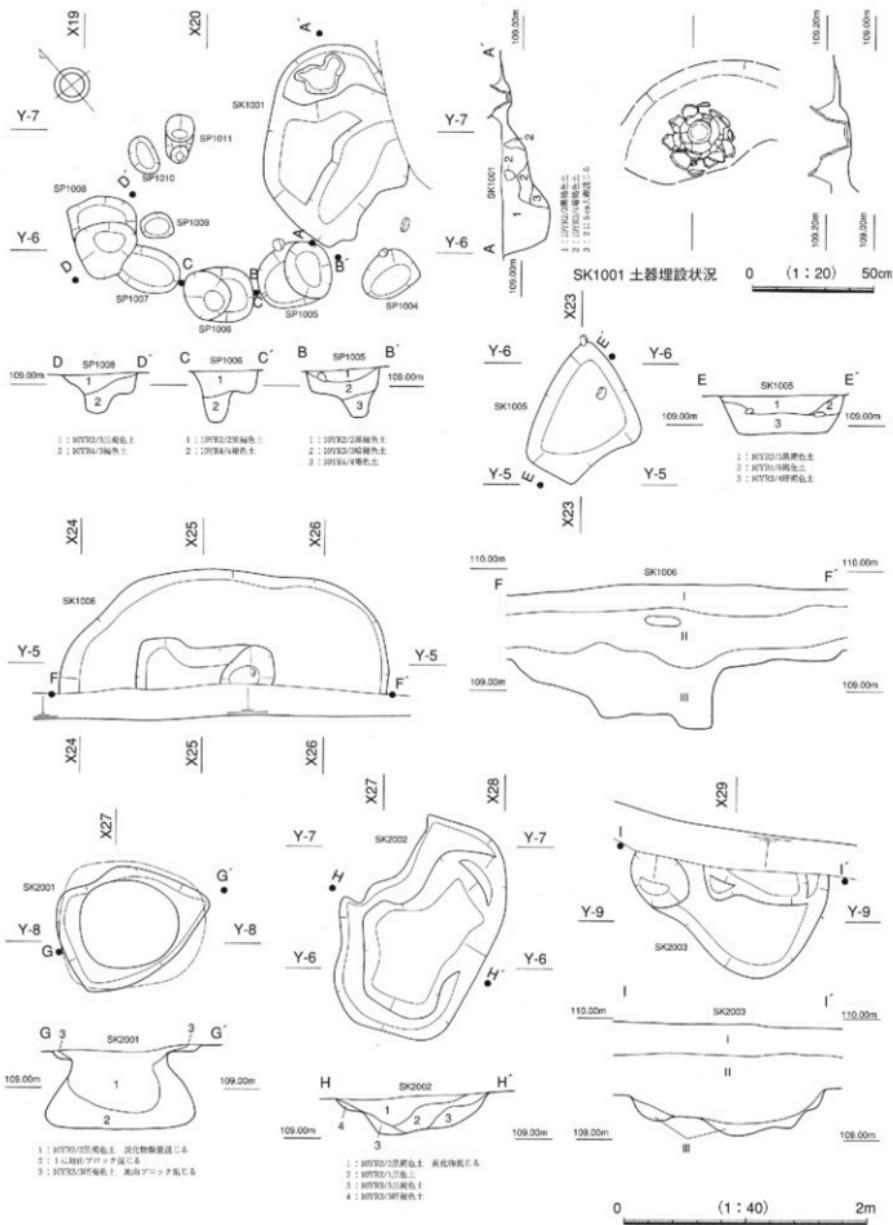
SK2001はII-1区で検出したいわゆる袋状土壙である。平面形は検出面では1.2m×0.6mほどの略三角形であるが、そこから5cmほど掘り込んだ平坦面のほぼ中央に径0.8mほどの円形の開口部があり、底面に向けて20～30cmほどオーバーハングしながら掘り込まれている。内部は最大で1.2m×1.0mの円形をなす。深さは検出面から65cmを測り、床面はほぼ平坦である。埋土中からは床面に近い位置から胎土に纖維を含まない土器の小片と磨面のある蛇紋岩礫（第15図の18）が1点ずつ出土したのみであり、貯蔵対象物の痕跡を示すものは検出されなかった。



第3図 遺構全体図 (縮尺 1/200)



第4図 遺構実測図(縮尺 1/40)  
SI1001



第5図 遺構実測図(縮尺 1/40)

SK1001, SP1004~SP1011, SK1005, SK1006, SK2001, SK2002, SK2003

## 2. 遺物（第6図～第14図・図版5～図版13）

今回の調査では、縄文土器・石器・土製品・石製品等が整理箱で約90箱分出土した。その多くは堅穴住居跡SI1001とその周辺からの出土である。ただし、先に述べたように住居跡出土遺物は造構に直接伴うものではなく、またその他他の造構においても新旧の土器群が入り混じっており、一括遺物としての取り扱いには慎重にならざるを得ない。ここでは、造構単位ではなく土器・石器・土製品・石製品類の順で概ね図版ごとにその概要を述べる。

### A. 土器（第6図～第11図・図版5～図版10）

縄文土器は、前期初頭の極楽寺式のものから中期後葉の串田新式のものまで長期間にわたるもののが確認できる。しかしこのうち主体をなすのは前期末～中期初頭に位置づけられる朝日下層式～新保I式のもので、それに次いで極楽寺式が多く、比定は困難なものそれらの間に位置づけうるもののが少量ある以外は、ほとんどが数点の破片が出土しているのみである。ここでは量的にまとめて出土しているこの3時期の土器群について時期別に述べる。

#### 縄文時代前期初頭の土器（第6図1～18、図版5）

東海地方の木島式に比定される8を除いては、全て極楽寺式に比定される織錦混入土器である。1～7は口縁部破片で、1・2を除く5点の口縁端部には縄文が押印されている。平縁のもの（1～5）と小波状を呈するもの（6・7）とが確認できる。1点のみ口縁帯を意識したような破片（11）が出土している以外は特に変化なく全体の器形を窺えるものはないが、おおむね砲弾形あるいは円筒形をなすものであろうと推測される。器面の調整は外側が縄文で内面はナデによるもの（1・4～7・12）が最も多く、その他外側縄文／内面条痕のもの（2・11・14）、表裏縄文のもの（3・13）のものなども確認できる。また1点のみではあるが、貝殻条痕が浅い沈線によって区画され、その外側が磨り消されたように無文となるもの（9）が出土しており、注意される。底部破片は4点出土しており、丸底のもの（15～17）と平底のもの（18）が認められる。このうち15は丸底中央部に径6mmほどの穴が貫通している。同様のものは過去の調査や採集品でも確認されており、その意図については不明であるが注目される。

#### 縄文時代前期中葉～後葉の土器（第6図19～24、図版5）

比定が困難であるが、先に述べた極楽寺式と後述する前期末～中期初頭の土器の間に位置づけられると判断したものをここで扱う。径5mm以上の太い粘土紐をつまみながら押し付けた押圧隆帯を横走させるもの（19・20）、それよりもやや細めの粘土紐を貼り付けたもの（21～23）、口縁部に円盤状の粘土板を貼り付けた突起を持つもの（24）などがある。全体の器形を窺える資料はないが、口縁部がゆるく外反するもの（19・21・24）、膨らみを持つと推測される胴部から頸部で屈曲して口縁部が外反あるいは内湾するもの（20・22・23）とがある。

#### 縄文時代前期末～中期初頭の土器（第7図～第11図、図版6～図版10）

第7図～第11図には前期末～中期初頭に位置づけられる朝日下層式～新保I式のもの、及びそれらに並行するであろうものを示した。当該時期の土器群をめぐっては研究史上多くの議論が交わされており、その区分や位置づけについては未だ流動的であるものと理解している。本来であれば充分な整理と検討を経た上で報告すべき資料群ではあるが、現時点では不用意な時期区分を避け、ここでは資料の概要を述べるにとどめておきたい。

第7図1～第8図13は、器面の装飾に極細の粘土紐を用いるいわゆる「ソーメン貼り」の一群であり、『真脇遺跡』報告（能登町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団1986）で朝日下層式とされた一群である。なお第7図2は4箇所の口縁部突起のうち主突起に当たる部分の縁取りにのみ、また同図12は口縁端部の外面にのみ粘土紐を貼り付けているのみであるがここに含めた。器形はほぼ円筒形をなすと推測される胴部から外反する口辺に内屈あるいは内湾する口縁部が付くもの（第7図1～12、第8図6・7）、胴部から口縁部までは直線的に立ち上がるあるいは口縁部がゆるく外反するおおむね円筒形をなすもの（第8図8～11）とがある。粘土紐の用い方には、粘土紐を斜縄文地に貼り付いたもの、斜行させた粘土紐にさらに直行する粘土紐を貼り付けて格子目状にしたもの、粘土紐を半段竹管による半隆起線に直行させて格子目状に貼り付けたもの、口縁端部や降带上に貼り並べるもの、短い粘土紐を交互に貼り付け

てジグザグ文にしたもの、貼り付けた粘土紐を竹管で押し引きして浮隆爪形文としたものなど様々なバリエーションが組み合わせられているが、朝日貝塚や真脇遺跡で見られるような小型の円形浮文は認められない。胸部の地文は斜縞文のものと木目状撲糸文のものがある。なお第8図1～5は2種の器形のうち前者の口縁部に付されていたものと推測される装飾突起である。いずれもモチーフは判然としないが、非常に手の込んだつくりであり、特に1は内部が中空となっている。

第8図14～第10図9は器面の装飾に粘土紐を用いない一群で、半截竹管による半隆起線あるいは平行沈線で文様を施すものである。量的には先のソーメン貼りの一群よりも多い。器形はほぼ共通するが、一部に腹部が張るもの（第8図15）、丸みを持つ小型の鉢状のもの（第8図16）などがある。半截竹管による文様は斜位に引き並べるもの、それに直行するヘラ状工具による沈線で格子目文とするもの、ジグザグ文とするものなどがある。地文には木目状撲糸文が多用されるが、第9図15では胸部が木目状撲糸文、口辺部が斜縞文を使い分けられている。

第8図14～第9図11は円筒形をなすと推測される胴部から外反する口辺に内屈あるいは内溝する口縁部が付くもので、第9図1～4はこれらの口縁部に付されていた装飾突起である。12は胴部と頸部の転換部に付されたアーチ状の把手で、13・14は円筒形をなす胸部である。なお、第9図に示したもののうち、3・4・8～11の口縁端部あるいは隆帯上に撲糸を押圧する一群、及び17・18の口辺部に継縫に間隔をおいた半隆起線を引き並べるものについては、より新しい雰囲気を持つものとして区分できるかもしれない。第10図1～9は胴部から口縁部まではほぼ直線的に立ち上がりおおむね円筒形をなすものである。半縫のものが多いが一部波状口縁となるものがある（8・9）。

第10図10～第11図7はほぼ円筒形をなす器形で、口辺部に絡状体あるいは繩文を押圧する一群である。第10図10～第11図3は大きさや地文の違いはあるが、波状口縁であること、口縁端部に繩文を押圧すること、竹管を押圧した低い隆帯状の突部で区切られた口辺部には波頭部を意識した絡状体の押圧がなされること等、非常に似通った一群である。東北地方円筒下層d式土器の影響を強く残した土器群とみられ、真脇遺跡でもこの時期に一定量の出土を見ているものである。ただしほぼ同様な内容を持つ石川県金沢市の上安原遺跡では出土しておらず、東北地方との地理的距離による要因が大きいものであろう。

なお、第10図8～9は出土した粗製土器のうち、器形や文様などにより上述してきた前期末～中期初頭土器群と並行するものであろうと考えたものであるが、詳細な位置づけについては不明である。

## B. 石器（第12図～第14図、図版11～図版13）

石器は、石槍・石鎌・削器・磨製石斧・打製石斧・石錐・叩石・磨石・凹石・砥石・石皿等が出土している。

第12図1は根柢なつくりの石槍で、断面形は分厚い三角形を呈する。石錐とも考えられるが、先端部に刺突による衝撃剥離痕が認められることから石槍とした。石材は信州産と推定される黒曜石製であり、この他にも今回の調査では2の石鎌をはじめ同様の黒曜石製石器が多く認められ（図版11の④～⑪）、注目される。前期末～中期初頭には信州産黒曜石が北陸地方に多量に流入するという現象があり、本遺跡の黒曜石製石器類も土器の在り方からみて同様の時期のものであろう。3・4は安山岩製の石鎌及び石錐未製品であり、3は縁辺部に非常に細かい鋸歯状の調節が加えられている。5～14は磨製石斧である。長さ10cmほどの比較的大型のものと5cm以下の小型のもの、またそれらの中間のものとが認められる。擦り切りによる素材の分割痕を残すものなく、12は手ごろな大きさの原礎に調整剥離を加えることなく直接刃部を研ぎ出したもので注目される。石材は緑色凝灰岩製の6と流紋岩製あるいは粘板岩製と考えられる13、また図示はしていないが砂岩製の図版11の13を除き全て蛇紋岩製である。中でも7は非常に美しい薄緑色を呈する石材を用いており、その幅に比して薄いつくりであること、全面に丁寧な研磨が及んでいることなどから、実用品ではなかった可能性も考えられる。15・16は蛇紋岩製の磨製石斧未製品で、15は研磨と調整剥離、16は調整剥離のみが認められる。17・18はいずれも凝灰岩製の打製石斧で、刃部を中心に磨耗が著しい。なお、調査区全体で打製石斧はこの2点のみの出土である。

第13図1・2はいずれも砂岩製の打欠石錐である。いずれも長軸の両端に複数回の剥離が加えられている。3～5は石器製作に用いられたものと考えられる叩石で、細長い素材の両端を中心に使用している。石材は3・4が砂岩で5が蛇紋岩である。4は表面に擦痕が多く残り、使用に際して手になじむように手が加えられたものと考えられ、それを裏付けるように両端は多面体状をなすほど使い込まれている。6～12は磨石・凹石類で、磨面・凹み・敲打痕等複数の使用痕跡を持つものが多い。概ね円形に近いものは表面、細長い形態のものは長側縁を磨面として利用しているようである。石材は6・7が花崗岩でその他は砂岩製である。

第14図1～4は砥石である。広く平坦な磨面・中央が円形に近く窪むボウル状の磨面・溝状の磨面等複数の研磨痕跡が残る場合が多い。磨製石斧の未製品や石製装飾品類の未製品が出土していることから、それらの製作に用いられたものであろう。いずれも砂岩製であるが粒度の違いがあり、研磨の工程によって使い分けられていた可能性がある。5～7は石皿あるいは台石で、大型で扁平な砂岩盤の表面に前述した砥石ほど顯著なものではないが磨面が認められる。

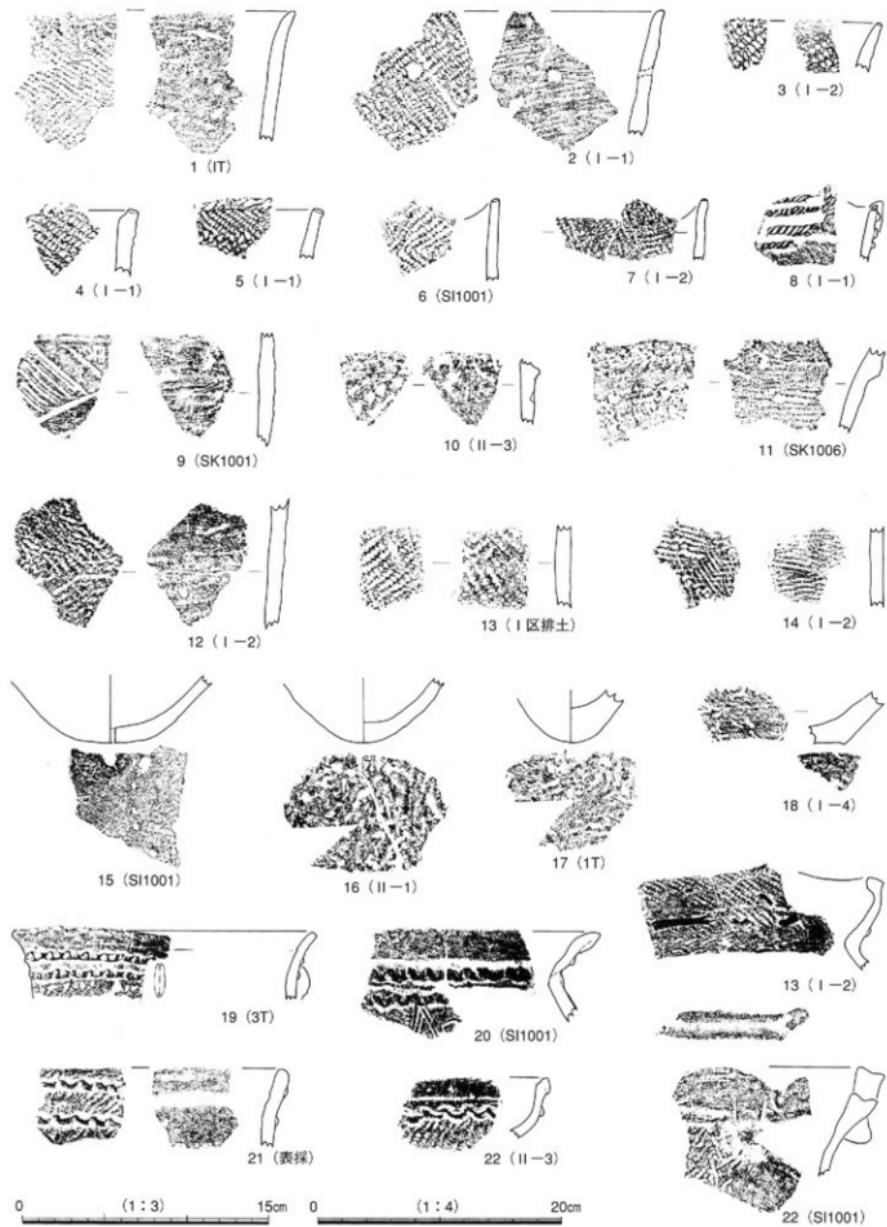
### C. 土製品・石製品（第15図、図版4・図版14）

前述した前期末葉～中期初頭土器群とともに今回の調査区を特徴付ける遺物として、土製・石製の装身具類及びその未製品と思しきものが多く出土している。

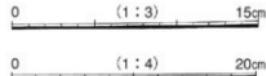
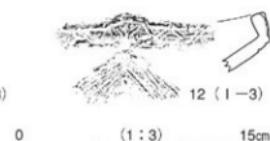
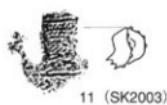
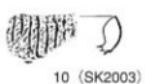
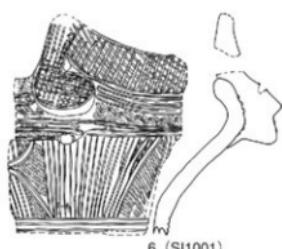
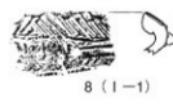
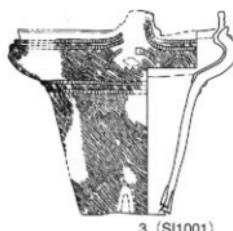
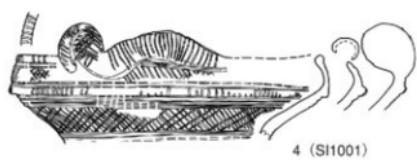
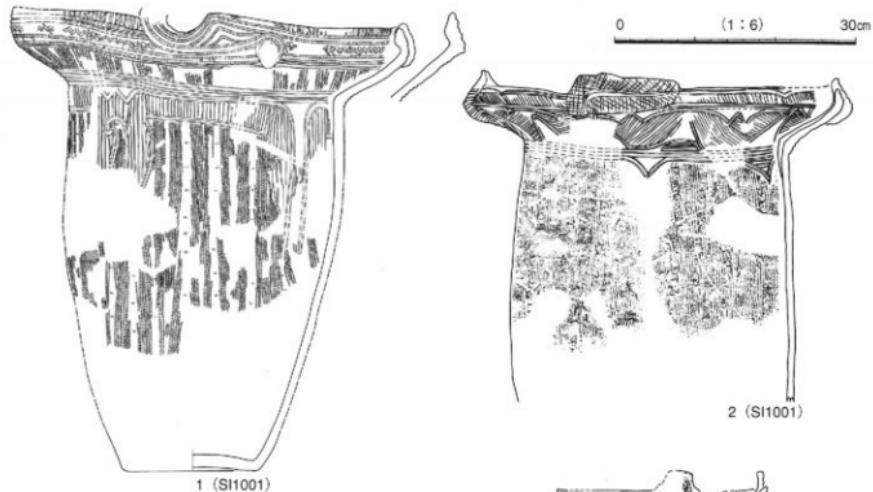
第15図1・2は土製の玦状耳飾である。いずれも欠損品ではあるが、ともに一端に明瞭な擦切り面をもち、耳栓・滑車形耳飾との区分は明瞭である。2点ともベンガラと考えられる赤色がほぼ全面に施されており、特に1は残りが良く発色も鮮やかである。真脇遺跡でも同様のものが前期末葉～中期初頭土器群とともに出土しており、本例もほぼ同時期のものであろう。3は両端を欠き全体形は不明であるが、勾玉状あるいは玦状耳飾状を呈する垂飾になるものかもしれない。側縁にはヘラ状の工具による刻みが施される。4は板状を呈する土製品で一端を欠ぐる、欠損部の上位に孔を有する垂飾の断片であろう。

5は透明感のある緑色を呈する軟玉製の玦状耳飾で、極楽寺遺跡では数少ない完形品である。表面には研磨痕が残り、最終的な仕上げ工程を残すのみの未製品と考えられる。6は調査区横の畠地で採取した白色の滑石製玦状耳飾である。半欠品で、表面には農耕具による傷が目立つ。これらの玦状耳飾はともに円環状をなし、藤田（1992）による型式率では、5が<sup>0</sup>0.64、6が<sup>0</sup>0.82となる。極楽寺式土器に伴う縄文時代前期初頭に位置づけられよう。7は灰褐色の滑石製垂飾である。素材は粗粒で、所々「す」が入ったように欠ける。縁辺には8箇所の切込みがあり、長軸上端附近に上端が突出する切目を伴う孔が両側から開けられている。前期初頭のものであろうか。8は小刀状を呈する蛇紋岩製の石製品である。片方の側縁には鋭利な刃部が研ぎ出され、反対側縁には表裏からの擦切痕が残る。一端を欠損しているが、谷藤（2002）の言う刀状石製品に類似する。その場合前期初頭に位置づけられるが、先端が幅広とならない点、少なくとも現存部分では切目が認められないこと等相違点もある。和鉢状を呈する玦状耳飾の断片およびそれを刃物として転用したものとも考えられるが、その場合前期末～中期初頭に位置づけられよう。9・10は緑色を呈する蛇紋岩製品で、いずれも薄く加工されて全体に研磨が及んでいる。垂飾の未製品と推測されるが、9は切目が長いタイプの玦状耳飾の素材ともなりうる。

11～22は緑色を呈する蛇紋岩の小砾で、一部に明瞭な研磨痕をもつものである。なお、図版14の①～⑯も蛇紋岩の小砾であるが、内眼では明瞭な研磨痕が確認できないものである。表面がタール状の被膜で覆われる16以外はいずれも美しい緑色を呈し、本遺跡で磨製石斧に供されている蛇紋岩とは一見して違いは明らかである。意図的に集められたものであろう。研磨の意図については不明であるが、北陸地方における縄文時代の攻玉遺跡では普通に認められるもので、未製品の一種、あるいはそうした作業と関わるものとの想定が可能かもしれない。

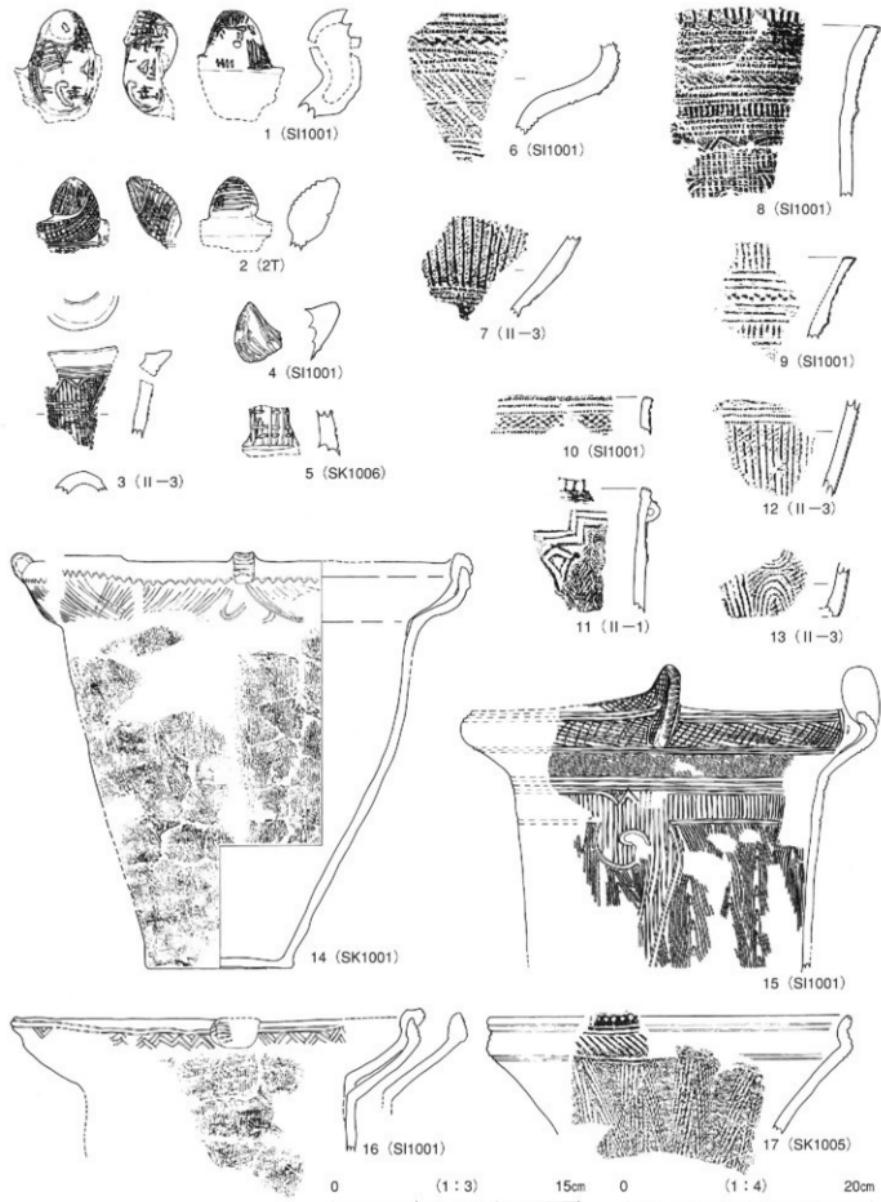


第6図 遺物実測図 (縮尺 19:1/4, その他:1/3)  
縄文土器



第7図 遺物実測図 (縮尺 1・3・5:1/4, 2:1/6, その他:1/3)  
縄文土器

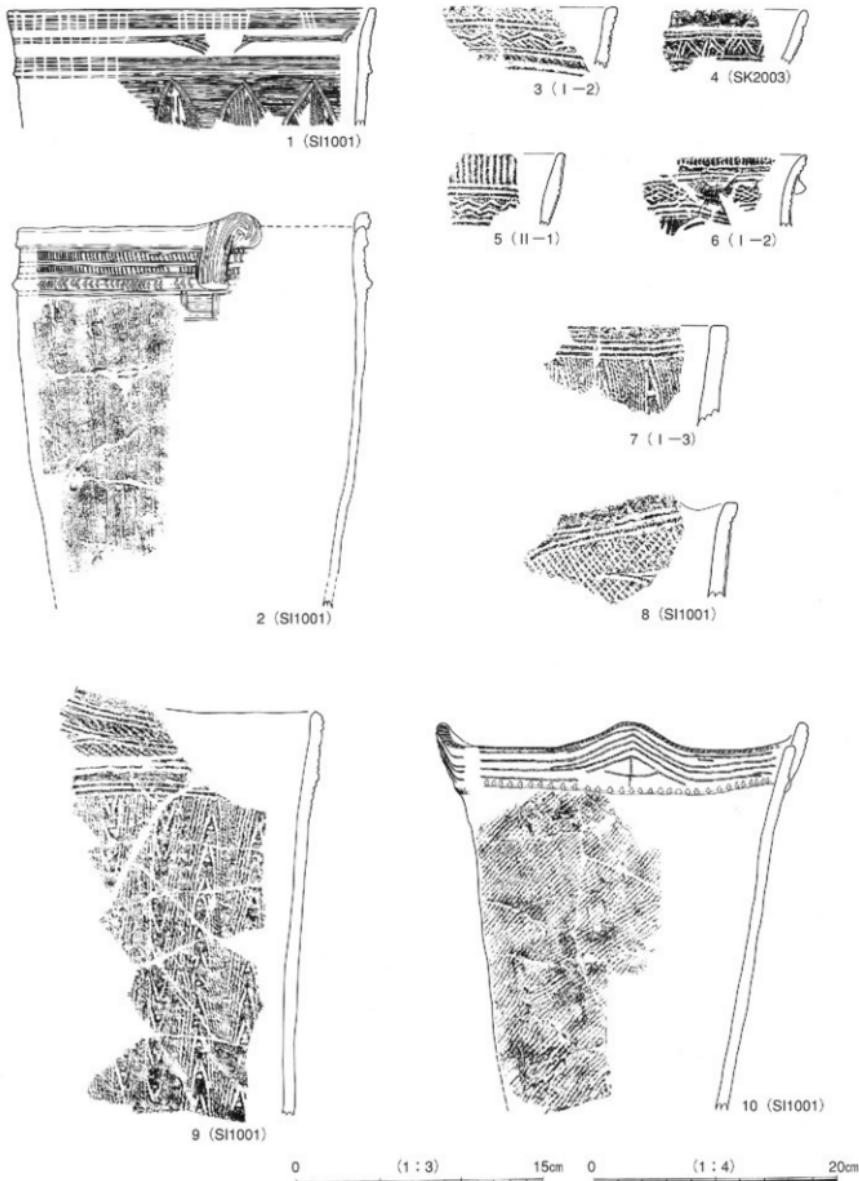




第8図 遺物実測図(縮尺 14-17:1/4, その他:1/3)  
縄文土器



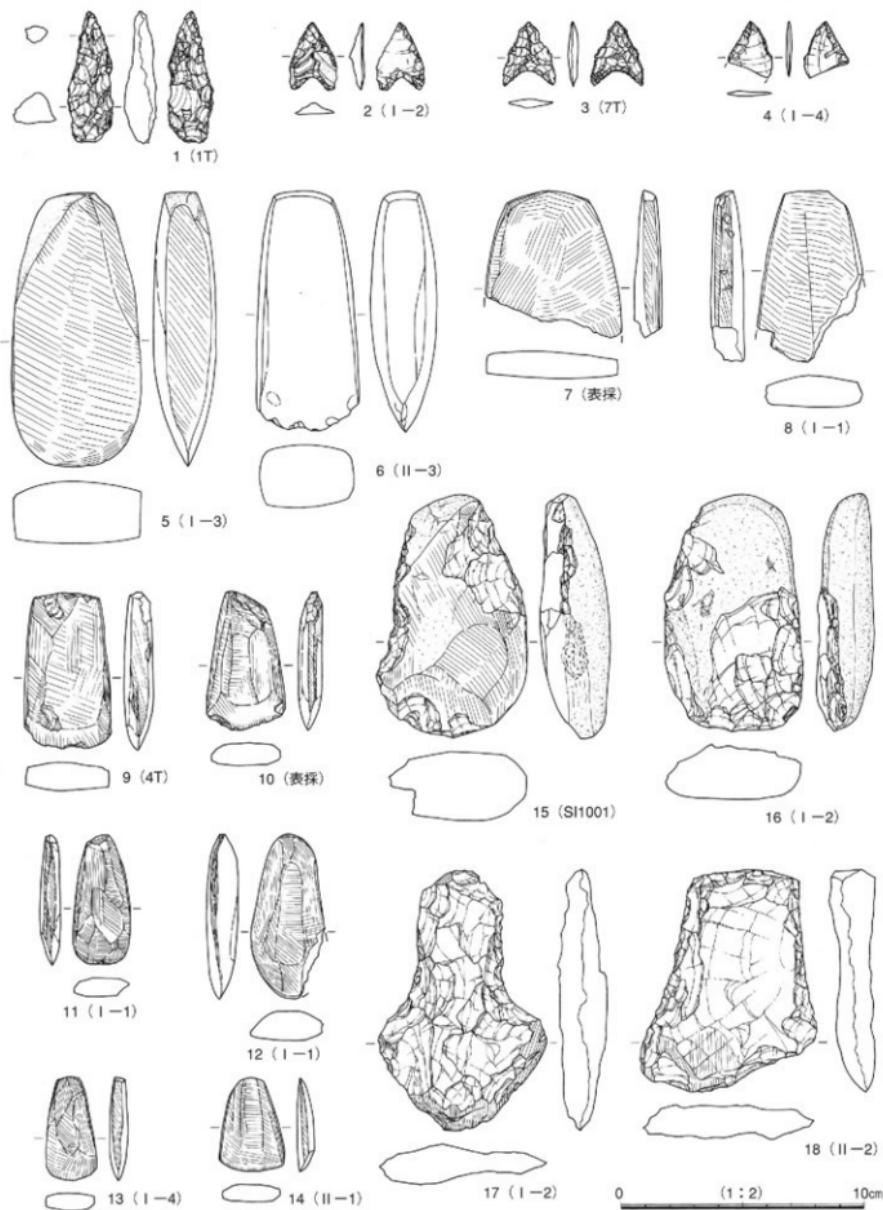
第9図 遺物実測図 (縮尺 13,15-17 : 1/4, その他 : 1/3)  
縄文土器



第10図 遺物実測図 (縮尺 1-2・10:1/4, その他:1/3)  
縄文土器

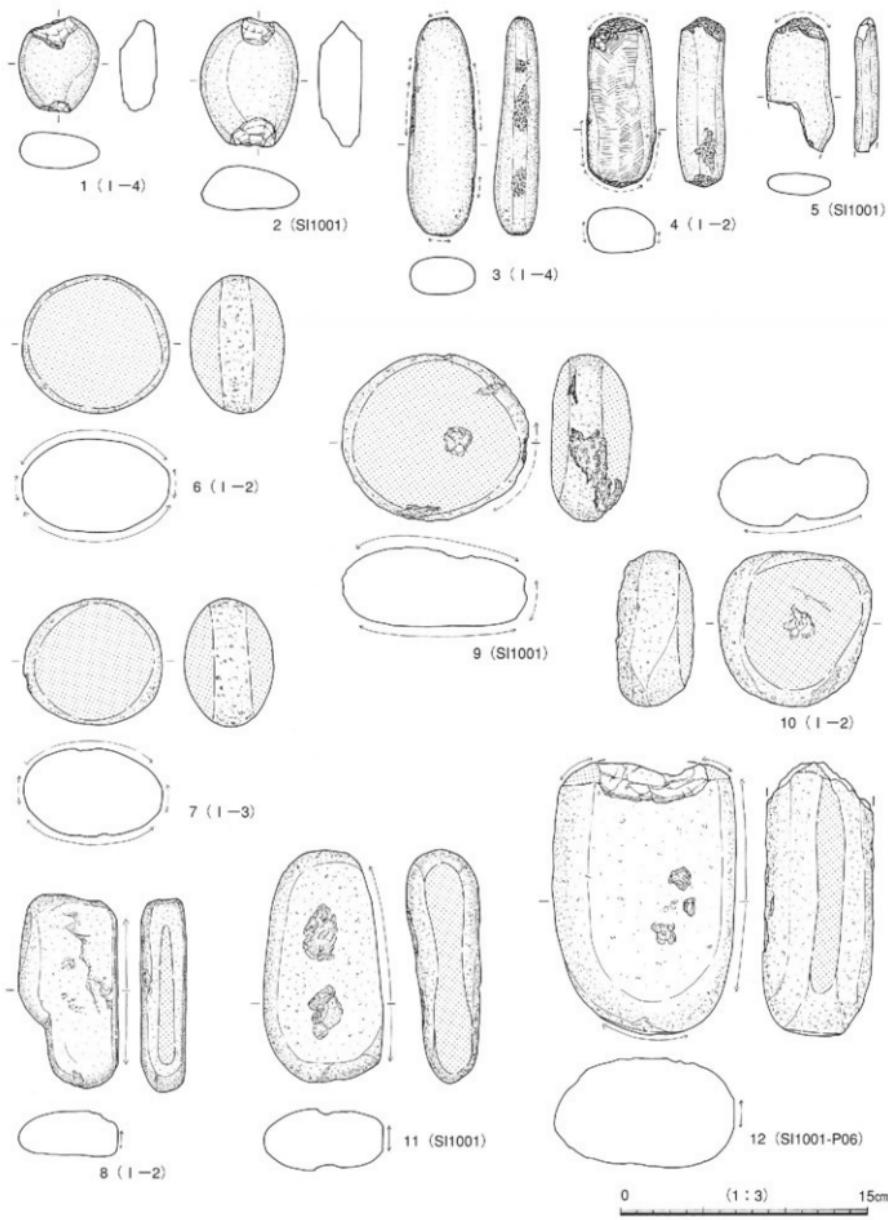


第11図 遺物実測図 (縮尺 1-4・9:1/4, その他:1/3)  
縄文土器



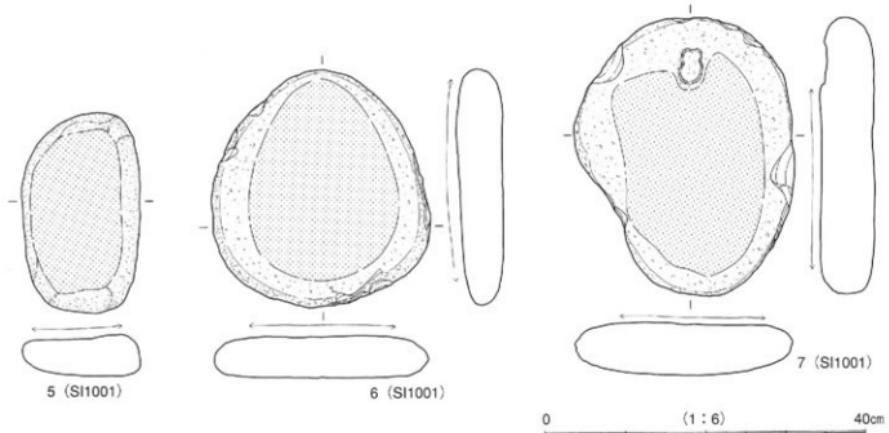
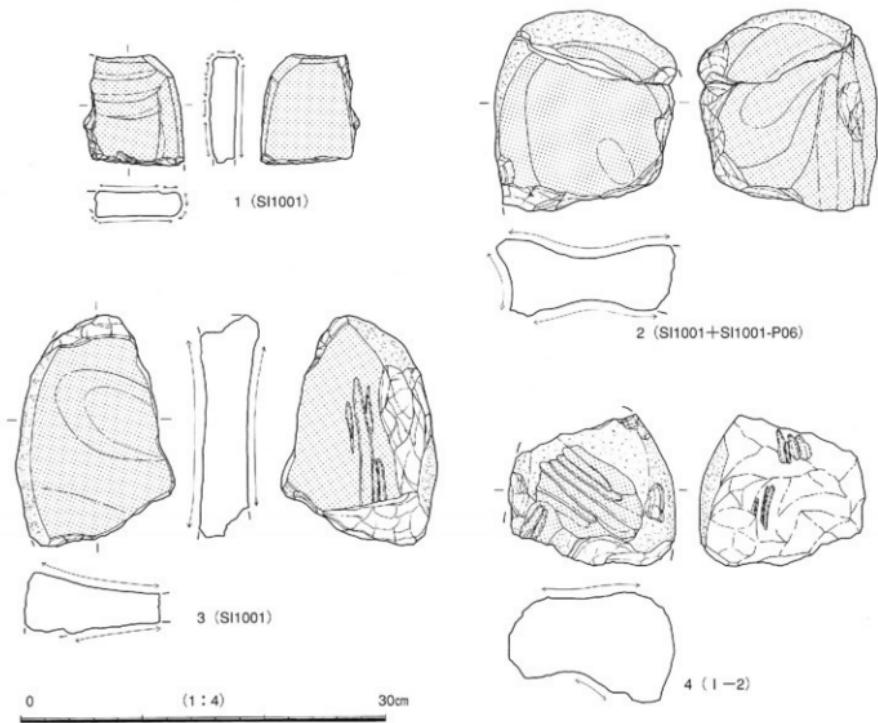
第12図 遺物実測図(縮尺 1/2)

1:石核、2-4:石鏨、5-14:磨製石斧、15-16:磨製石斧未製品、17-18:打製石斧



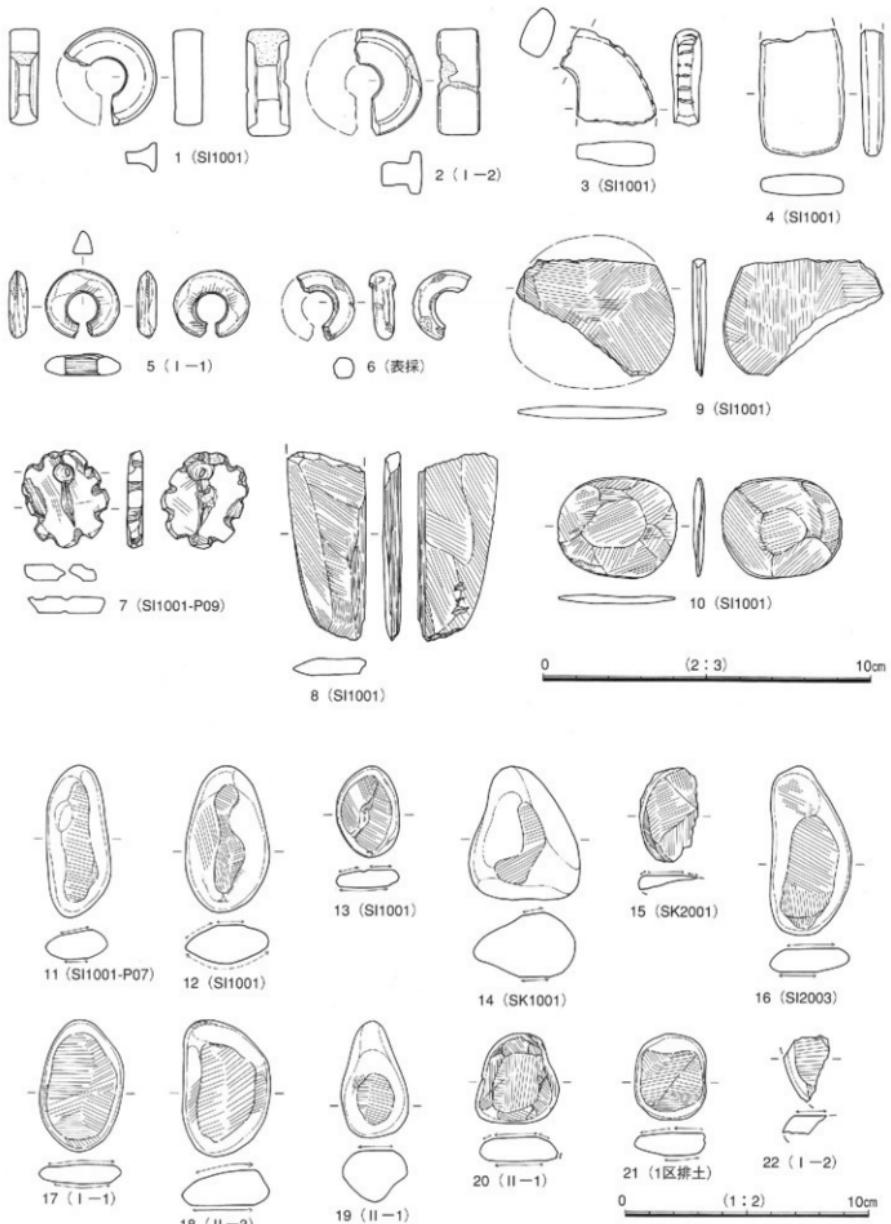
第13図 遺物実測図(縮尺 1/3)

1・2：石錐，3-5：叩石，6-12：磨石・凹石類



第14図 遺物実測図(縮尺 1-4:1/4, 5-7:1/6)

1-4: 砥石, 5-7: 石皿



第15図 遺物実測図(縮尺 1-10:2/3, 11-22:1/2)

1-4:土製品, 5-10:石製品, 11-22:磨面のある蛇紋岩礫

## V まとめ

前述の調査結果とそこから得られた見解を整理し、まとめに代えたい。

1. 極楽寺遺跡は、富山県中新川郡上市町極楽寺に所在する。遺跡は上市川左岸の河岸段丘上、段丘縁部が上市川に向けてやや張り出して視界が開ける部分に占地しており、標高は110m前後、現河床との比高差は約20mを測る。
2. 調査では、調査区西半のI区・II区において縄文時代に属する堅穴住居跡1棟、土壙9基及び多数の穴等を検出した。このうち堅穴住居跡は長軸4.8m、短軸3.1mの長円形プランを呈するもので、中央北寄りの地点には地床炉が存在する。本住居跡からは多量の土器・石器類を得たが、いわゆる吹上パターンと称される遺物廃棄の状況を示しており、本住居跡に直接的に伴うものではないようである。明確な床面遺物が多く住居跡の構築・使用された時期の比定は困難であるが、大量に投棄された前期末～中期初頭の土器群に近い年代が推定される。
3. 出土遺物は縄文土器・石器・土製品・石製品等で、調査区全体で整理箱約90箱分が出土したが、それらの大部分は堅穴住居跡SI1001とその周辺からの出土である。
4. 縄文土器は、前期初頭の極楽寺式から中期後葉の串田新式のものまで長期間にわたるもののが確認できるが、このうち主体をなすのは前期末～中期初頭に位置づけられる朝日下層式～新保I式のもので、標式遺跡でもある氷見市朝日貝塚以外には県下での検出例が乏しく様相が不明瞭であったものである。今回の大量出土により当該時期研究の進展が見込まれる。紙幅の都合もありここでは詳細な検討を加えることはできなかったが、今後の課題としたい。
5. 石器は、石槍・石鎌・削器・磨製石斧・打製石斧・石錘・叩石・磨石・凹石・砥石・石皿等多岐にわたる器種が出土している。このうち、叩石・砥石等、石器・石製品の製作にかかわる道具類が多く出土していることが特筆される。
6. 前述した前期末～中期初頭土器群とともに今回の調査区を特徴付ける遺物として、土製・石製の玦状耳飾や垂飾、「刀状石製品」に類似する特殊な形態のもの、さらにはそれらの未製品が出土している。これまで知られていた前期初頭段階における石製品製作の伝統が前期末～中期初頭にまで及ぶものであったことを示唆する。

## 引用・参考文献

- 金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003『石川県金沢市上安原遺跡』『縄文時代編』
- 小島俊彰 1968「北陸における縄文前期末の様相一編年の確認と土器分布図についてー」『信濃』第20巻第4号
- 小島俊彰 1974「北陸の縄文時代中期の編年一戦後の研究史と現状ー」『大境』第5号
- 小島俊彰1977「珠洲郡内浦町松波新保遺跡発掘資料再見」『石川考古学研究会々誌』第20号
- 小島俊彰 1985「朝日貝塚の朝日下層式土器再見」『大境』第9号
- 小林謙一 2001「北陸地方の縄文時代前期末葉から中期前葉における土器編年の問題」『金沢大学日本海域研究』第32号
- 小林達雄編 1988『縄文土器大観』3 中期Ⅱ・小学館
- 小林達雄編 1989『縄文土器大観』1 草創期 早期・前期、小学館
- 谷藤保彦 2002「前期初等の玉飾りについてー中国新石器時代の視点からー」『縄文時代』第13号
- 富山県 1972『富山県史』考古編
- 富山県教育委員会 1965『極楽寺遺跡発掘調査報告書』
- 富山県立水見高等学校歴史クラブ 1964『富山県水見地方考古学遺跡と遺物』
- 能都町教育委員会・真庭遺跡発掘調査団1986『石川県能都町真庭遺跡』
- 水見市 2002『水見市史』7 資料編五 考古
- 藤田富士夫 1983「玦状耳飾」「縄文文化の研究」7、越山閣
- 藤田富士夫 1992『玉とヒスイ』同恵社出版
- 藤田富士夫編 2003『環日本海の玉文化の始源と展開』

# 附章 富山県上市町極楽寺遺跡出土試料の<sup>14</sup>C年代測定

小林謙一<sup>(1)</sup>・坂本 稔<sup>(2)</sup>

1) 国立歴史民俗博物館 情報資料研究部 2) 総合研究大学院大学 博士後期課程 日本歴史研究専攻

富山県上市町極楽寺遺跡出土繩紋時代前期土器付着物及び伴出した炭化材の<sup>14</sup>C年代測定を試みた。以下に、採取試料の状況、処理方法、測定及び曆年較正を報告する。

## 1 測定対象資料と炭化物の状態

試料番号はTYKIとした。住居炉内出土炭化材片1点を含む14点の試料を採取し、SI1001出土朝日下層式土器4点(TYKI3.4.6.9)、炭化材1点(TYKI14)、包含層出土前期初頭土器1点(TYKI11)の計6点について処理、TYKI6.14の2点について<sup>14</sup>C年代を得た。結果を得たTYKI6は、腹部破片外側の膜状の付着物、TYKI14は細かな炭化物で、樹種は不明である。

## 2 炭化物の処理

試料については、以下の手順で試料処理を行った。(1)の作業は、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において小林、(2)(3)は、坂本が行った。ただし、炭素量が少なかったため、TYKI14は、(3)の作業を、地球科学研究所を通してベータアナリティック社へ委託した。

### (1) 前処理：有機溶媒による油脂成分等の除去、酸・アルカリ・酸による化学洗浄（AAA処理）。

まずアセトンに浸け振とうし、油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した（1回）。AAA処理は、すべてマニュアルで行った。80°C、各1時間で、希塩酸溶液(1N-HCl)で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去（2回）し、さらにアルカリ溶液（炭化材は1N-NaOH、土器付着物は0.1N）でフミン酸等を除去する。3回処理を行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに充分（240分）に酸処理を行い中和後、水により洗浄した（4回）。土器付着物については、前処理のうち、最初のアルカリ溶液を保存してある。

### (2) 二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を酸化（二酸化炭素化）、真空ラインを用いて不純物を除去。

(3) グラファイト化：鉄（またはコバルト）触媒のもとで水素還元しグラファイト炭素に転換。アルミニウムカソードに充填。

AAA処理の済んだ乾燥試料を、500mgの酸化銅とともにバイコールガラス管に投じ、真空に引いてガスバーナーで封じ切った。このガラス管を電気炉で850°Cで3時間加熱して試料を完全に燃焼させた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので、ガラス真空ラインを用いてこれを分離・精製した。

1.5mgのグラファイトに相当する二酸化炭素を分取し、水素ガスとともにバイコールガラス管に封じた。これを電気炉で650°Cで12時間加熱してグラファイトを得た。管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり、グラファイトはこの鉄粉の周囲に析出する。グラファイトは鉄粉とよく混合した後、穴径1mmのアルミニウムカソードに60kgfの圧力で充填した。

## 3 測定結果と曆年の較正

AMSによる<sup>14</sup>C測定は、地球科学研究所を通してベータアナリティック社（測定機関番号Beta）に依頼して行った。

年代データの<sup>14</sup>CBPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した<sup>14</sup>C年代（モデル年代）であることを示す（BPまたはyr BPと記すことが多いが、本稿では<sup>14</sup>CBPとする）。<sup>14</sup>Cの半減期は国際的に5,568年を用いて計算すること

になっている。誤差は測定における統計誤差（1標準偏差、68%信頼限界）である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の<sup>14</sup>C/<sup>13</sup>C比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比により、<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比に対する同位体効果を調べ補正する。ペータアナリティック社は十分な炭素量がある場合、<sup>13</sup>C用ガス試料を質量分析計により測定した<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比の値を示してある。<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比は、標準体（古生物belemnite化石の炭酸カルシウムの<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比）偏差値に対する千分率（ppm）で示され、この値を-25‰に規格化して得られる<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比によって補正する。補正した<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比から、<sup>14</sup>C年代値（モデル年代）が得られる（英語表記ではConventional Ageとされることが多い）。

測定値を較正曲線INTCAL98（暦年代と炭素14年代を暦年代に修正するためのデータベース、1998年版）(Stuiver,M.,et.al. 1998)と比較することによって実年代（暦年代）を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。暦年較正プログラムは、OxCal Programに準じた方法で作成したプログラムを用いている。統計誤差は2標準偏差に相当する、95%信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦 cal BCで示す。（ ）内は推定確率である。図は、各試料の暦年較正の確率分布である。炭化材は、古木効果など、その採取位置の年輪により古くなる可能性がある。2試料の重なる年代のうち前3640-3520年の間に含まれる可能性が高いであろう。

この分析は、日本学術振興会科学研究費 平成15年度基盤研究(A・1)（一般）「縄文時代・弥生時代の高精度年代体系の構築」（課題番号13308009）の成果を用いている。分析には、国立歴史民俗博物館今村峯雄教授、試料処理においては、東邦大学野田稔、舛田奈緒子両君の協力を得た。記して謝意を表します。

## 参考文献

- 小林謙一・今村峯雄・坂本稔・西本豊弘2003「AMS炭素年代による縄紋中期土器・集落の継続時間の検討」『日本文化財科学会第20回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会  
Stuiver,M.,et.al. 1998 INTCAL98 Radiocarbon age calibration,24,000-0 cal BP.Radiocarbon 40(3),1041-1083.

表1 試料の重量と炭素含有率

No.	採取量	処理量	回収量	含有率1	精製	ガス*	含有率2	含有率3
TYKI 3	28.0	28.0	0.30	1.1	—	—	—	— 3)
TYKI 4	29.0	29.0	0.00	0.0	—	—	—	— 3)
TYKI 6	35.0	35.0	4.63	13.2	3.70	1.71	46.3	6.1 1)
TYKI 9	70.0	47.0	0.00	0.0	—	—	—	— 3)
TYKI 11	73.0	60.0	0.00	0.0	—	—	—	— 3)
TYKI 14	3.0	3.0	1.00	33.3	1.00	0.60	60.0	19.8 2)

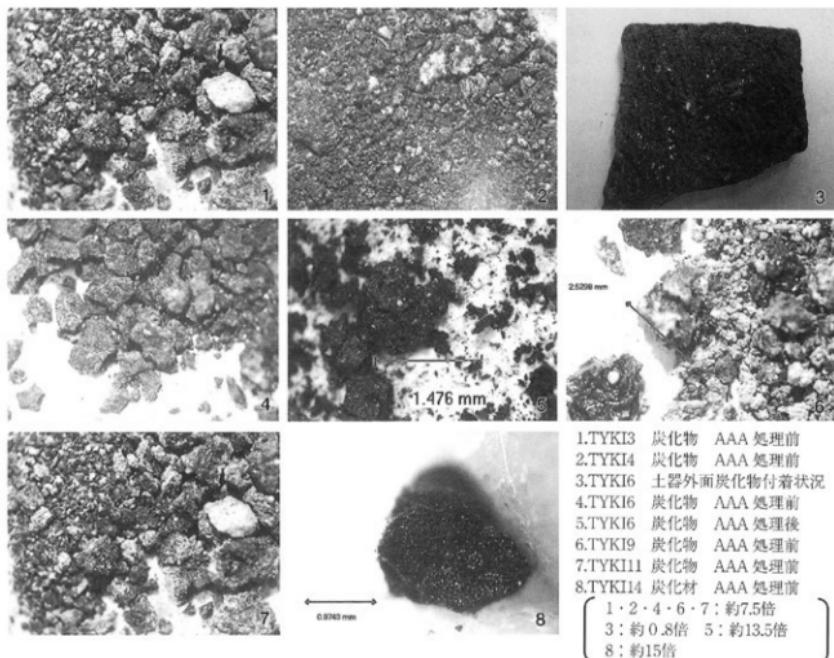
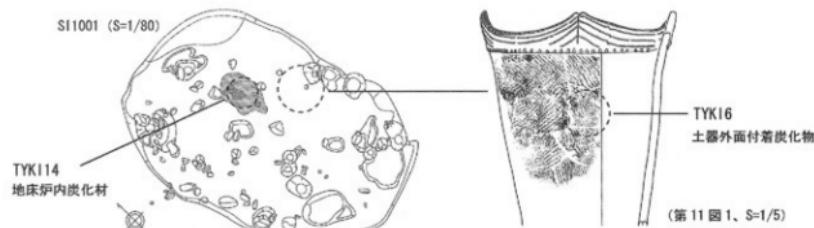
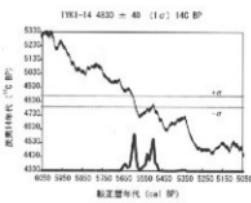
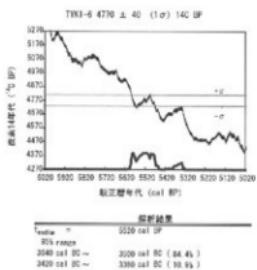
\*は、二酸化炭素の炭素相当量

含有率1は回収量/処理量、含有率2はガス相当量/精製用重量、含有率3は含有率1\*含有率2。

1)は、処理(1)く小林・処理(2)(3)を坂本、2)は(1)を小林・(2)を坂本が処理、3)は炭素量不足で、調整・測定は保留した。

表2 炭素年代および暦年較正年代

測定機関番号	試料番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正値14CBP	較正年代 cal BC %	%
Beta-188193	TYKI 6	-26.0	4770 ± 40	3640-3500 84.4%	3420-3380 10.9%
Beta-188528	TYKI 14	-26.3	4830 ± 40	3690-3620 45.5%	3600-3520 49.5%



- 1.TYK13 炭化物 AAA 处理前
  - 2.TYK14 炭化物 AAA 处理前
  - 3.TYK16 土器外面炭化物付着状況
  - 4.TYK16 炭化物 AAA 处理前
  - 5.TYK16 炭化物 AAA 处理後
  - 6.TYK10 炭化物 AAA 处理前
  - 7.TYK11 炭化物 AAA 处理前
  - 8.TYK14 炭化材 AAA 处理前
- 1・2・4・6・7：約7.5倍  
3：約0.8倍 5：約13.5倍  
8：約15倍



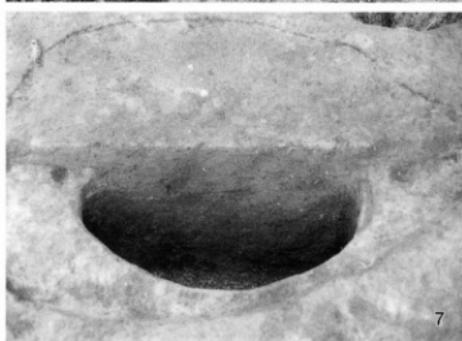
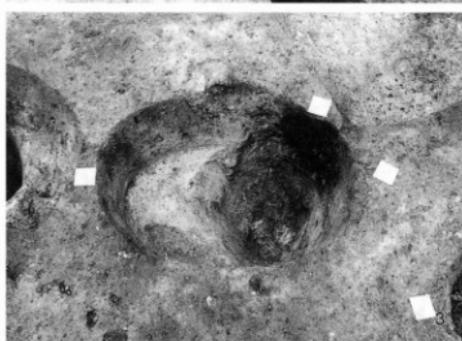
図版1 遺構写真

1:道路遠景(北東から), 2:調査区全景(西から)



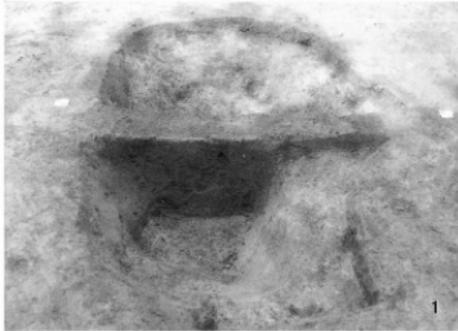
図版2 遺構写真

1-3: SI1001 遺物出土状況。4: SI1001 実掘状況

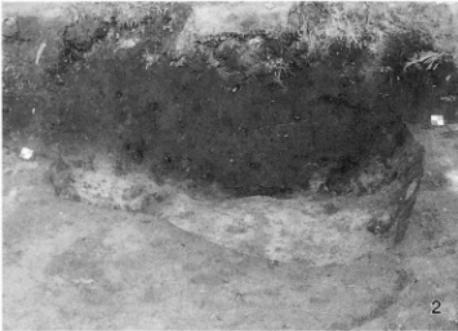


図版3 遺構写真

1・2: SK1001, 3: SP1005, 4: SP1006, 5: SK1005, 6: SK1006, 7・8: SK2001



1



2



3



4



15-1



15-2



15-3



15-4



15-5



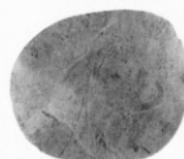
15-6



15-7



15-9



15-10



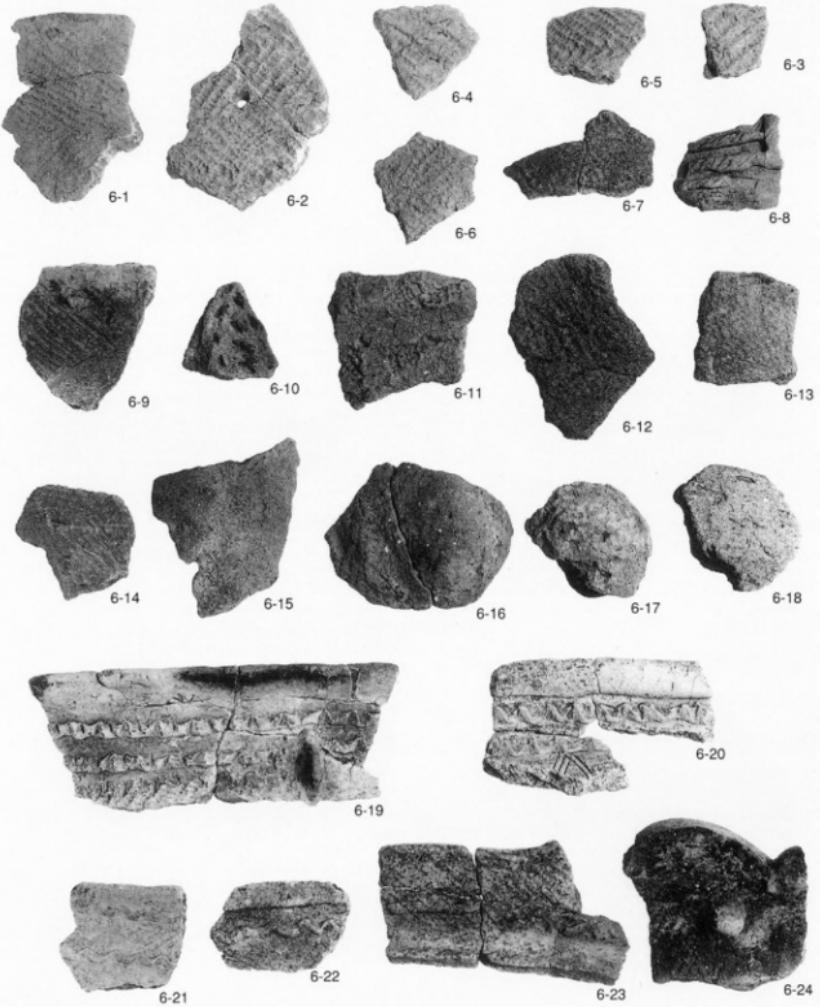
15-8

5

図版4 遺構・遺物写真

1:SK2002, 2:SK2003, 3・4:調査風景

5:土製品・石製品(実大、第15回参照)



図版5 遺物写真(縮尺 1/2)  
第6図参照



7-1



7-2



7-3



7-4



7-6



7-5



7-7



7-8



7-12



7-9

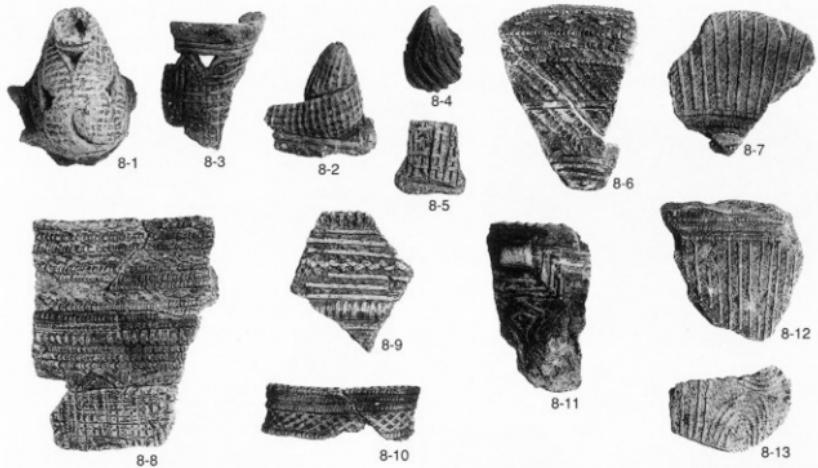


7-10

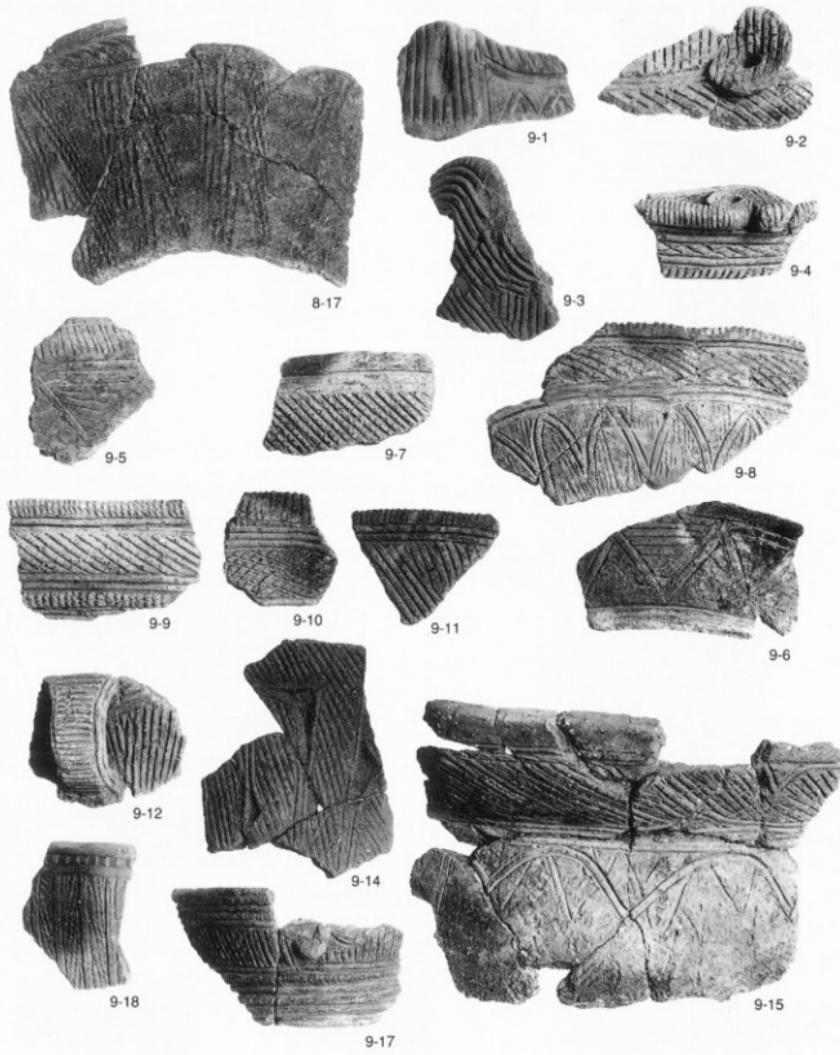


7-11

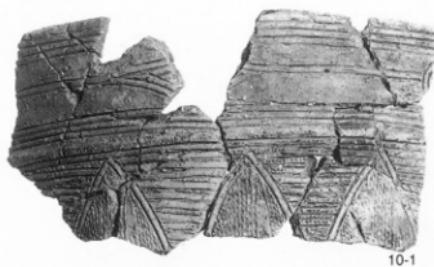
図版 6 遺物写真 (縮尺 7-1・7-2: 1/6, 7-3・7-4: 1/4, その他: 1/2)  
第7図参照



図版7 遺物写真 (縮尺 8-14:1/6, 8-15・8-16・9-13・9-16:1/4, その他:1/2)  
第8図・第9図参照



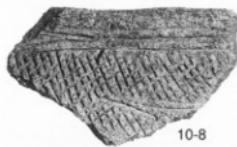
図版 8 遺物写真(縮尺 1/2)  
第8図・第9図参照



10-1



10-9



10-8



10-7



10-4



10-3



10-5



10-6



10-2



10-10

図版9 遺物写真 (縮尺 10-2・10-10:1/4, その他:1/2)  
第10図参照



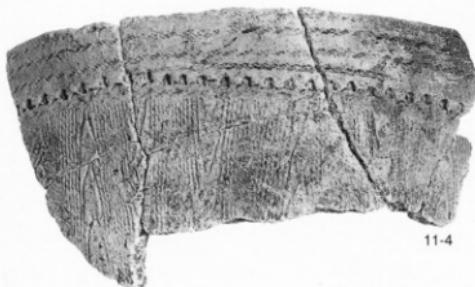
11-1



11-2



11-3



11-4



11-9



11-6



11-7



11-5

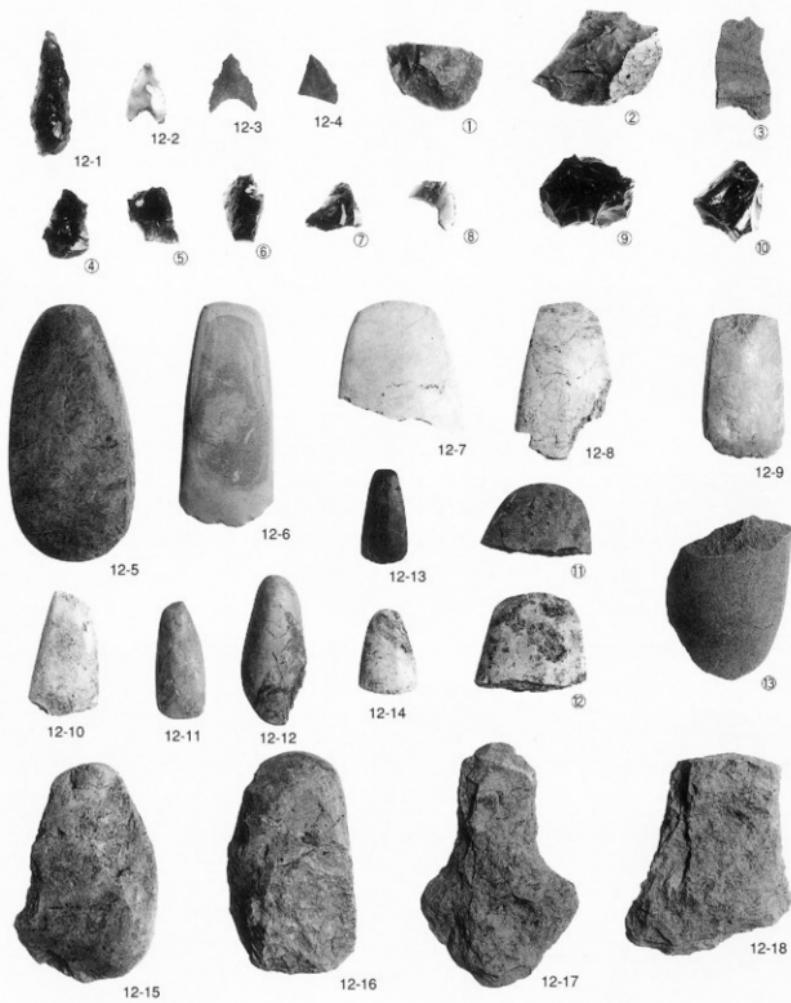


11-8

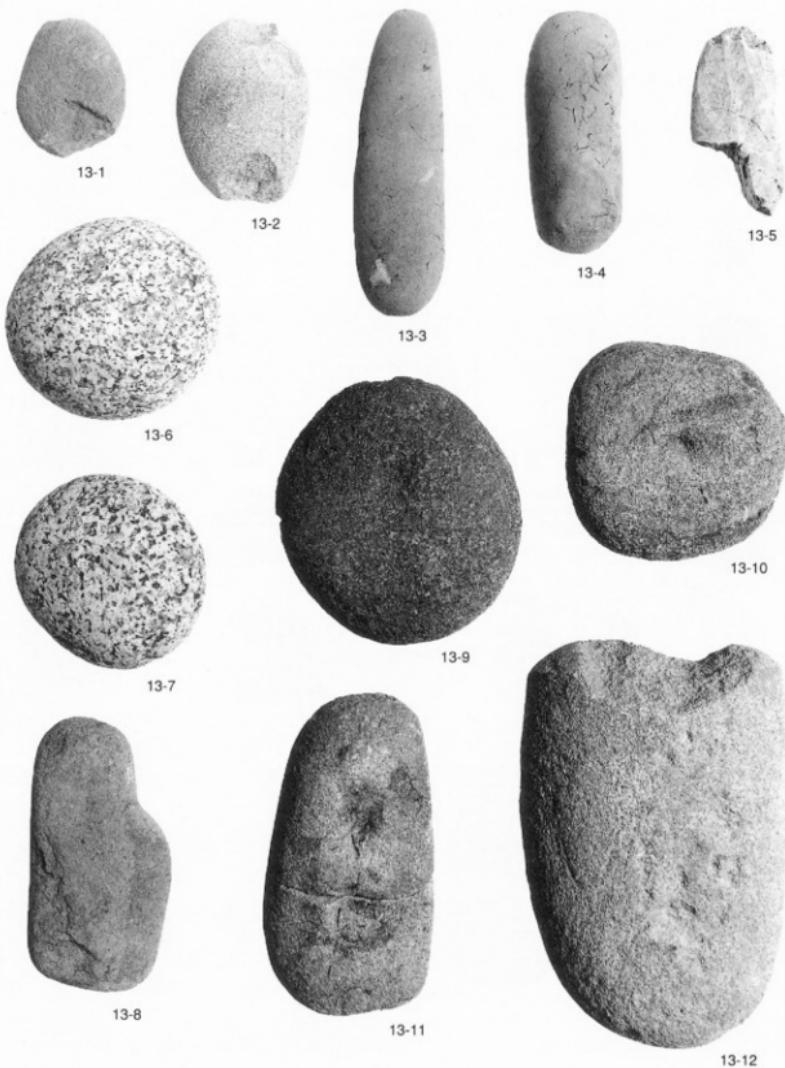


11-10

図版10 遺物写真 (縮尺 11-1~11-3:1/4, その他:1/2)  
第11図参照



図版11 遺物写真(縮尺 1/2)  
第12図参照



図版12 遺物写真(縮尺 1/2)  
第13図参照



14-1



14-2



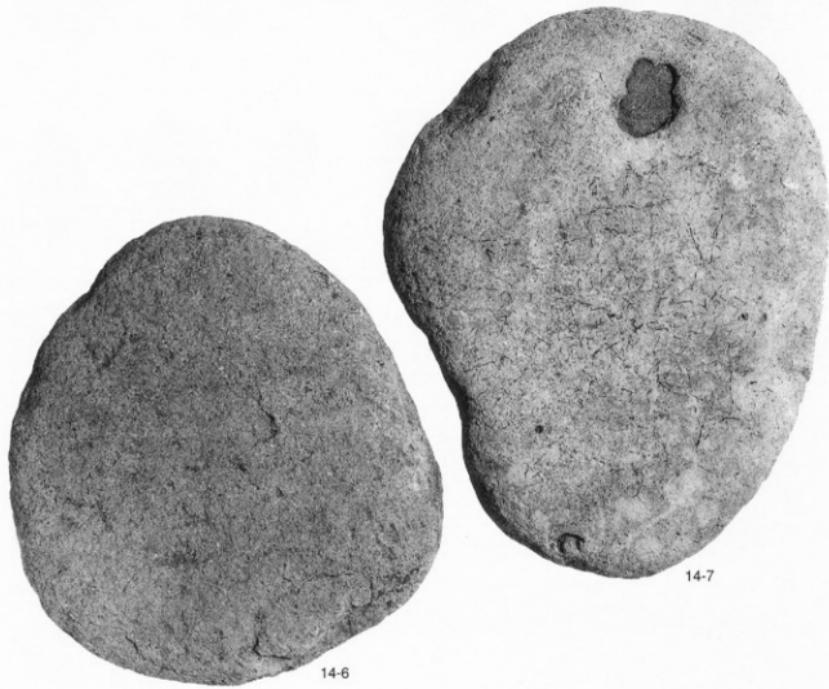
14-3



14-4



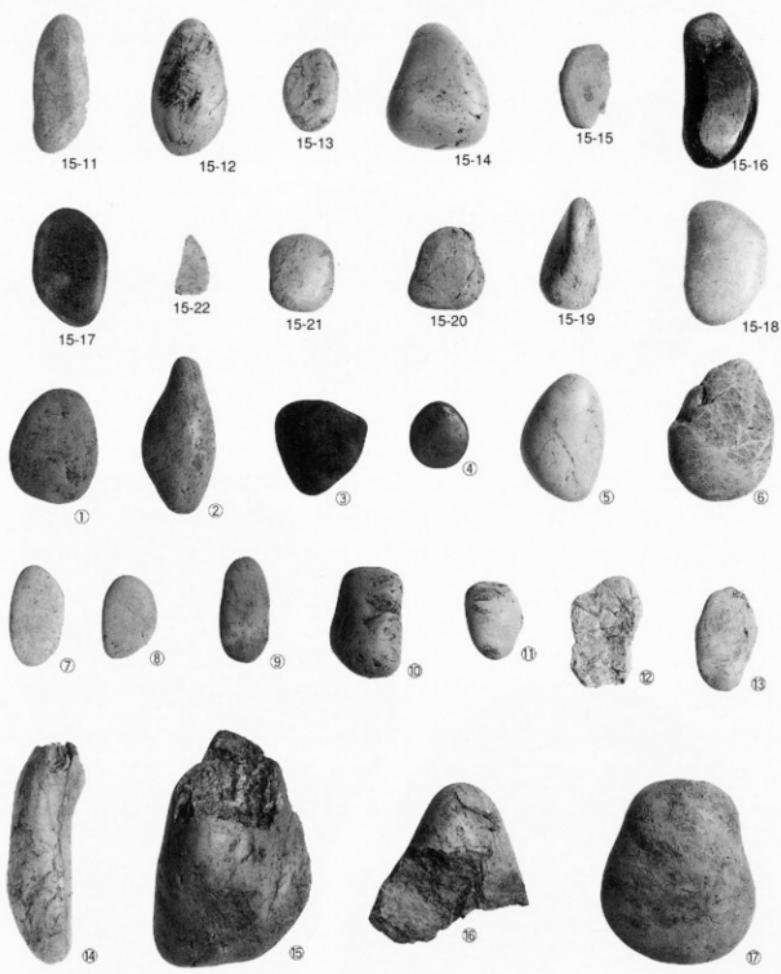
14-5



14-6

14-7

図版13 遺物写真 (縮尺 1/4)  
第14図参照



図版14 遺物写真(縮尺 1/2)  
第15図参照

## 報告書抄録

ふりがな	とやおけんかみいちらまちごくらくじいせきははくつちょうきがいほ						
書名	富山県上市町極楽寺遺跡発掘調査概報 極楽寺地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う緊急発掘調査						
編著者名	高慶 孝・小林謙一・坂本 稔・三浦知徳						
編集機関	上市町教育委員会						
所在地	〒930-0393 富山県中新川郡上市町法音寺1番地						
発行年月日	平成16年3月19日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
ごくらくじ 極楽寺遺跡	なかにいかわぐん 中新川郡 かみいちらまちごくらくじ 上市町極楽寺	016322 322052	36度41分37秒 (世界測地系)	137度23分40秒 (世界測地系)	20030616 ～ 20030731	400	急傾斜地崩 壊対策事業 に伴う発掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
極楽寺遺跡	集落	縄文	堅穴住居跡 土壤 穴	縄文土器 石器 土製品 石製品	県下での検出例の少ない縄文時代前期末～中期初頭の土器群が堅穴住居跡の窪地に多量に投棄された状態で出土した(吹上バーン)。また、琰状耳飾をはじめとする土製品・石製品及びその未製品も多く出土し、製作地であったことが窺われた。		

富山県上市町  
極楽寺遺跡発掘調査概報  
—極楽寺地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う緊急発掘調査—

発行日 平成16年3月19日  
編集・発行 上市町教育委員会  
印刷者 株式会社 ニューエフ

